

アメリカの幼児たちも“麒麟”や“蜘蛛”を学習

五十一年の夏、アメリカを周遊した折、私は、フィラデルフィアの郊外にある“人間能力開発研究所”を訪れました。“ドーマン博士の幼児開発法”や“親こそ最良の医師”などの著書によって、わが国にもその名を知られたグレン・ドーマン博士の経営する研究所です。

研究所の中をあちらこちら案内されているうちに、紙障子で囲まれた和室に案内されました。そこは、アメリカの幼児(大体は三歳児)たちが漢字を学習する部屋でした。室内には、わが国の中学生だって読めない“麒麟”や“蜘蛛”などを含む漢字カードが、沢山備え付けられています。

夏休み中でしたから、ドーマン博士はもとより、幼児教育に当たる先生も幼児たちもいませんでしたので、どのような目的で、どのような学習をしているのか、知る由もありませんでしたが、その漢字学習は“漢字を覚えるための学習”ではなくて、“幼児の頭の働きを良くするための漢字学習”に違いない、と私は思いました。

なぜならばアメリカの幼児たちが、漢字を覚え、漢字が読めるようにな

ったからと言って、実生活の上で何の役にも立たないからです。幼児たちの生活の場には、漢字は一つだって見られません。漢字はアメリカの幼児たちには全く実用的価値がないのです。

それよりも、日本の幼児が鳩や鶴から鳥を自然に発見し、鯉や鱒どじょうから魚を理解するように、アメリカの幼児も“英語を漢字で学習する”ことで、分析したり総合したりする態度や習慣を養い、物事を帰納的に考えたり、演繹的に思考する能力を育てることをねらっているのだと思います。

“はと”や“つる”という表記では“とり”が出て来ないように、pigeon, crane という綴りで学習したのでは、それが bird であるという思考が育たないからです。